

「統一日一生」を編集して

この度刊行されました「内村鑑三・統一日一生」について、編集の実務を担当した者として、少しく感想を申し述べてみたいと存じます。

「統一日一生」は、教文館版「内村鑑三聖書注解全集」、同信仰著作全集」全四十一巻の中から、内村先生の信仰と精神の精髓エッセンスと思われる文章（必ずしも、まとまったものばかりでなく、長文の一篇を適宜取捨選択したものもあります）を選び出し、これに適当な聖句を配して、一年三百六十六日に配列したものです。このほかに二十程の詩歌その他が余白頁に付加されています。編集の意図、方法などは、すべて、内村先生ご自身が編まれた第一の「一日一生」に依りましたが、体裁は教文館刊・生誕百年記念版に準じています。

編集に当って特に留意したことは、内容にバライアテイをもたせるということでした。第一の「

一日一生」とちがって、この度は選択の範囲がずっと広がって、日記書簡を除く先生の全著作がその対象となりましたし、選択の方法も内容本位に、かなり自由にしましたので、この点はほぼ意を達したかと考えます。従って、この「一日一生」には、福音とキリスト教信仰の根本問題はもちろん、人生と信仰生活の実際問題に至る、あらゆる問題がとりあげられています。たとえば、読書（一月十三日）、礼儀（五月十七日）、労働と報酬（六月二十九日）、責任（八月三日）、文通（九月三日）、病氣（十月二十五日）、紳士（十一月十六日）、金銭（十二月二十日）、家憲（三四〇頁）などは、極めて具體的な教訓で、第一の「一日一生」には見られない新しい項目だろうと思います。

しかも、こうした「一日一日の記事が、一生涯考えつづけるに足るだけの価値を持っている」（「聖書講義」第二三六号、三〇頁）のです。この内容のすばらしさは、編集の拙を補って余りあるものと信じています。

そして内村先生は、自らこれらの大問題と取り組み、自ら血と汗と涙を流して体得された真理を、

ある時は靈感にふるえる詩人のごとく、ある時は十字架にすぎる幼児のように、ある時は同情溢れる人生の友として、ある時は毅然たる預言者のごとくに、あるいは歌い、あるいは祈り、あるいは慰め、あるいは教えられるのです。ここには、尊敬すべき、なつかしい人間内村鑑三が息づいています。もちろん、編集の目的が目的ですから、これをもって内村鑑三を体系づけることはできませんが、人はこの一本によって、内村先生のほぼすべてを知り得るのではないかと自負しております。

近来、日本の近代思想史に占める内村先生の位置が高く評価されるに至って、内村鑑三研究が盛んになりましたが、そうした研究の成果は、内村先生を何であるかと規定するのではありませんか。内村鑑三はいかなる人物か、人間内村の本領いかに、ということですが、これはなかなかの難問であります。

内村先生の愛された言葉に、ホイットマンの「われに大なる矛盾あり。そは、われは大なれば

なり」があります。多くの偉人がそうであるように、内村先生もまた矛盾の人でありました（十月十八日）。そして人は、人間内村を追うの余り、しばしば、この「大なる矛盾」にふりまわされて、内村先生の本質を見失ってしまうのです。先生は、クリスチャンを定義して「彼は奇怪人物なり。しかして神の子なるがゆえに、人の中にありては奇怪人物たるなり」（十二月十四日）と言っておられますが、まことに言い得て妙であります。

そして結局、先生のこの言葉が、先生自身を解く鍵です。内村先生は何であるよりも、クリスチャンであった、「生けるクリストがその内に在りて働きたもう者たるよりほかの者ではない」（一月十七日）のです。「クリストと共に起き、クリストと共に働き、クリストと共に眠りにつく」（二〇六頁）クリストの人―これが、内村鑑三のすべてであります。

わたくしどもが、本書編集の精神、目的としたところも、この一事にありました。わたくしどもは、内村先生を尊敬すること人後に落ちませんが、わたくしどもが、この「統一日一生」によって伝

えたいと願ったものは、決して内村鑑三ではなく、キリストの福音であります。日ごとに、読者に読んでいただきたいと願うものは、決して内村鑑三の言葉でなく、聖書の神の言であります。わたくしどもは、内村先生の精華と思われるこれらの文章が、それを為し得ると信じて、この一本を編集したのです。なぜなら、以上述べた理由から、内村鑑三を明らかにすることは、とりもなおさず、内村鑑三の信じたキリスト教を明らかにすることになり、わたくしどもは、それが、これこそが聖書のキリスト教であり、キリストの福音である、と固く信ずるからであります。

山本先生は、第一の「一日一生」を解説して、「本書にもられた著者の信仰は深刻であり、強烈であるだけでなく、すこぶる特異なもので、しばしば『はたしてこれをキリスト教と呼びうるだろうか』と疑わせるほどのものである」（記念版四〇八頁）と言っておられますが、これはそのまま、第二の「一日一生」にもあてはまるものです。そこで、深刻であり、強烈であるだけでなく、

「すこぶる特異な」内村先生の信仰を、端的に示しているような文章を、幾つか挙げてみることにします。

○独立とは、自己の有するすべての実力を活用することである。（三月二十三日）

○真理を探研しようと思うならば、異端をこそ試むべきである。（五月三日）

○信仰上もつとも大切なものは、信仰の弁別である。（五月十四日）

○世の誤解を恐れるな。（六月十九日）

○武士の靈魂にキリストを宿らせよ。（七月三日）

○平和実現の秘訣は、公義の厳格な実行にある。（七月七日）

○肉とこの世のことに関しては、祈祷の聞かれな
いことが恵みである。（七月十三日）

○制度をして生命を完うせしめよ。（七月二十日）

○貧は自由・独立のとも伴である（八月五日）

○奥義中の奥義は、悪が善をなすという人生の事実である。（八月二十五日）

○孤独は神に達するの恵みの道である。（十月十日）

○忍耐とは頑固に直進することである。(十月二十六日)

○みずから進んで、人に自分の信仰を勧めない。(十月二十八日)

○人にはずかしめられることが、神の栄光をあらわす道である。(十月三十日)

○天国は休息所ではなくして活動場はたらきばである。(十一月十四日)

○ひばりとわいに学んで、単独の勢力たれ。(二七二頁)

これらはほんの一例にすぎませんが、どの一文も、およそ人の思い及ばぬ論旨であります。しかも、こんにち世上一般に行われるキリスト教からは、こうした言葉を聞くことはできないであります。『はたしてこれをキリスト教と呼びうるでしょう。』「はたしてこれをキリスト教と呼びうるだろうか」と怪しむ人があるのも、故なしとしません。しかし、特異と奇異はちがいます。人の目をみはらさせるこれらの文章は、いずれも、広く人類の知識と道念に根差し(七月六日参照)、深く聖書の真理に基づき(十一月一日参照)、熱く神の愛に動かされて(十月三日参照)成ったもので、

実は極めて常識的なものであります(六月二十四日、八月十三日参照)。

すべてのものが急速に移り変わるこの時代にあつて、五十年も六十年も昔の内村先生の文が、今なおこれを読む人の心を捉えてやまない、その生命と能力ちからの秘密は、実にこの「特異な」信仰にあるのです。

次に、内村先生の特異な信仰の内容をなすものとして、編集集中特に感じた点を二つだけ挙げておきたいと思ひます。

その第一は、先生の信仰が極めて来世的であるということ。『余のすべての善きものは墓のあなたにおいて在る。余の自由も、余の満足も、余の冠も、すべて来たらんとするキリストの王国において在る。』ゆえに、この世における余の生涯はどうでもよい。余の永久の運命は、この世における余の境遇によつて定められるものではない。余の運命を定める者は、余のために自己を捨てたまいし、余の救い主イエス・キリストである。(七月二十八日、十二月二十九日および二月二十一日参照)。ゆえに、この世の不公平や苦しみは、

かえって来世の希望を堅くするものであるとし（十月二十九日、九月二日）、これに関連して、不幸・患難の存在理由、その目的、その処し方、その祝福を説いた文章がたくさんあります（一月三十一日、二月十日、三月十八日、四月十日、五月二十九日、八月十一日、十月十七日、十一月十九日、二十四、二十六日など）。そしてそのいずれもが、直接間接に来世信仰に固く結びつけられています。人生の重荷にくずおれる者、己が罪に泣く者、信仰の戦いに苦闘する者が、これらの文章によって、どんなにか深く慰められ、強く励まされ、新しい希望にふるいたたしめられることでありましたようか。

第二は、先生の信仰が徹頭徹尾福音的であるということです。世人殊に教会人は、しばしば、内村先生をもって厳格一方の預言者であるとしますが、これは大きな誤りです。確かに先生は生涯この世と、教会と、自分自身に対して、激しい戦いを続けられた戦士であり、正義を唱道してやまない神の預言者でありました。しかし、内村先生はそれ以上に、絶えず「キリストの平静の中和」に

憩う、優しい愛の人であったのです（聖書講義二三四号、二八九〜二九〇頁）。だからこそ、先生の書かれたものには、一言一句、実に温い福音的慰めがあるのです。左に一例を掲げます。

○暗中に処する道は、静かに神を待ち望むことである。（二月十八日）

○失敗を悲しまず、損失を感謝せよ。（二月二十四日、十二月九日）

○凡人たるの幸福。（四月二十八日）

○信仰を維持する事だけが、一大伝道事業である。（六月十三日）

○信者の事業は信ずることである。（七月十八日）

○小事にいそしみ、不完全に堪えよ。（八月八日）

○毎日少しずつ。（八月二十六日）

○イエスの感化によって、人生は生くるかいあり、興味あるものとなる。（十月三十一日）

○道德の意味とその用い方。（十一月五日）

○純然たる神の子供となれ。（十一月二十一日）

○キリスト教の信仰の秘訣。（十二月十九日）

○信者の生涯は、最後が最善である。（十二月三十一日）

「信仰は、いかほどキリストを思うか、その事である。キリストに対する情愛の起こった者が信者である。」（三月九日）先生のキリストに対する熱愛が伝わってくるようなこの言葉は、先生晩年のものですが、内村鑑三は結局これです。これ以外に内村先生はありません。先生の無教会主義も（一〇六頁参照）、非戦論も（八月十五日参照）、再臨運動も、社会改良も、慈善も、伝道事業も、聖書研究も、等身大の著作も、その「勇ましい高尚なる生涯」も（三月十二日参照）、すべてはここに発して、ここに帰り来たるのです。これは、まことに単純な信仰であります。しかし、単純は生命であり、力です（三月十六日参照）。

恐らく、内村先生のキリスト教は、これから本当の意味で、愛する日本人の間に理解され、信ぜられ、受容せられていくことでありましょう。もし日本の福音化が許されるとすれば、この信仰以外に用いられるべき信仰はないと信じます。わたくしどもは、この拙き一編が、その盛る宝のゆえに、その為に豊かに用いられんことを祈ってやみ

ません。

最後に、私事にわたることを一言付け加えることを、お許し願います。

顧みますると、わたくしが内村先生のキリスト教によって生きようと決心してから、本書刊行の時をもって、ちょうど満十年になります。その間、幾多の曲折を経て失敗と遅滞を重ねましたが、とも角にも今日まで、この信仰一途に生きてくることができましたのは、一と重に神のあわれみと、師友の祈りの賜物と感謝しております。

以上のようなわけで、本書は、わたくし個人にとっても一つの信仰の記念碑となりました。本書によって、わたくしはわたくしの内村鑑三観と、これは大へんおこがましい言い方になりますが、内村先生の言葉によって、わたくし自身の信仰をも表明し得たかと信じております。

もちろん、わたくしは山本先生を通して内村先生を知り、山本先生に学んで内村先生を理解し、山本先生に師事して内村先生に傾倒するに至ったものであります。わたくしの内村観というべきも

のがあるとするれば、これは一つとして山本先生に
負わぬものはありません。わたくしにとつて、キ
リスト教とは、パウロ・ルーテル・内村鑑三のキ
リスト教であり、これは神の導きにより、山本先
生がわたくしに教えて下さったものであります。
この度の編集に当たつて、わたくしが一応選択、
配列したものを、山本先生が全体にわたつて校訂、
監修し、これをわたくしとの共編として下さった
ことは、このような理由から、わたくしにとつて
非常に名誉であり、恐縮と共に感激措くあたわざ
るものがあります。

（付記）今から十三年前、フトしたことから、武
藤君とわたしとは、キリストを共通の主と仰ぎ、
内村先生を共通の師（わたしには親しく教えを受
けた師、武藤君には未見の師）と慕うようになり
ました。そして二人が会えば、話題は、いつも、
必ず内村先生でした。わたしたちは先生の結婚だ
とか、離婚だとかいう話には何の関心もありません

んでした。問題は先生の信じていたキリスト教と、
先生が遺した福音の精神と本質とでした。二人は
いつも夢中で語り合いました。時のたつのを忘れ、
夜の更けるのにも気付きませんでした。実に、実
に楽しい、楽しい十年でした。昨年春、「一日一
生」の続編を計画した時、編集者は武藤君を措い
て他にないと思いましたが、結果はそれが誤つて
いなかつたことを立証してくれました。心からな
る感謝を神にささげまつると同時に、同君の非常
労苦に対し深い謝意を表する次第です。本書の信
仰は内村先生の信仰であると同時に、同君の十年
の涙と汗の結晶なる信仰でもあります。故にわた
したちは本書を世に送ります。（山本）

（所載）「聖書講義」237 一九六五年二月